

## 菊池 勘左エ門先生の思い出

本 間 嘉 晴

(佐 渡 博 物 館)

菊池先生との出会いというか、おつき合いをさせていただくようになったのは財団法人佐渡博物館を建設しようという気運のたかまりと、その建設促進運動の最中であつた。

昭和30年(1955)7月に、佐渡博物館設置促進委員会

結成大会を金井村公民館で開催したのであるが、この大会には、両津市および佐渡郡内各種団体の長によびかけて出席をお願いし、各代表80余名の参加があつた。役員選出の結果、予期どおり菊池先生が会長に選ばれ、博物館建設運動を大きく展開することになった。

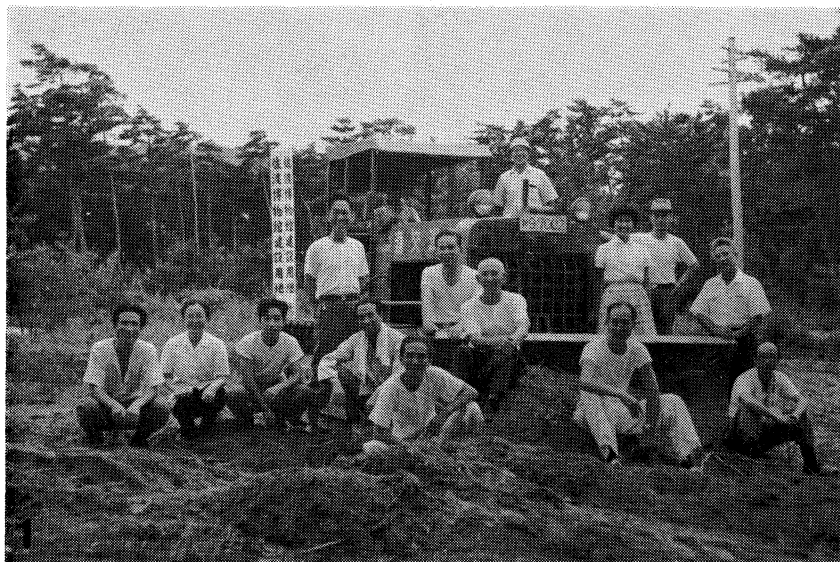


図1 佐渡博物館建設用地で、整地作業に従事した一同。昭和41年(1956)9月16日。ほぼ中央に、地下足袋をはいたのが菊池先生。

図2 整地作業の一場面  
左端が菊池先生(図1と同日)。

図3 同じく整地作業中  
遠方中央が菊池先生。



昭和30年10月には佐渡博物館設置促進委員会は、佐渡博物館建設委員会に切り換えられ、菊池先生は引続き会長に選ばれた。当時菊池先生は両津高等学校の校長の職にあり、私は佐渡高等学校の教諭であった。

昭和31年3月末、先生は両津高等学校長を退職され、博物館建設に専念されることになり、同年4月には、佐渡博物館設立発起委員会に切り換えられ、昭和31年9月財団法人佐渡博物館の登記に先だって、理事長に就任、同年同月の16日と23日の両日にわたり、理事長以下、理事、評議員の一部の方々、事務局員等が、八幡観光ホテル横の松林の整地作業に参加した(図1)。

先生は御年配にもかかわらず、額に汗しながら先頭になってブルドーザーでおこした松木の整理に当られた。その姿がなつかしくおもい出される(図2,3)。

昭和33年10月、先生は両津市の教育長(33年10月～38年1月)に就任された。当時市は、学区問題、学校の統廃合をひかえて政治問題化していた時であった。当時の氏田市長の特別の依頼で出場せざるを得なかったようである。

佐渡博物館の理事長兼館長の外に市の教育長(常勤)と勤務しなければならないので、どうしたものかと私に個人的に御相談があった。私は臨時理事会を開いて承認を得る時間的余裕もないと判断し、後日理事会で承認を得ることとし、そのことは私が全責任をとるから、どうぞ教育長をおひきうけてははいかがですかとおすすめした。その後、様子をみていたが政争にまきこまれて、たいへん苦勞されていたようである。政治的かけひきのできる人柄ではないので、おすすめしたことがなにか悪いことをしたような気持であった。

先生は昭和30年7月より、お亡くなりになる昭和55年2月まで、県の文化財調査審議委員(天然記念物関係)をされていた。私も昭和30年7月から39年まで県文化財調査審議委員(考古遺跡、遺物関係)をしており、この間、審議委員会にはいつも同席したのである。たしか昭和33年ごろから36年ごろと思うが、天然記念物として北蒲原郡水原町瓢湖のオニバスの県指定と、新津市古田の八珍柿の原木の県指定の時であったように記憶している。前者については、日本海側北限の位置について、後者については古い原木の所在地のちがいについて、菊池先生と新潟大学の江村先生との間に意見、見解のくい

ちがいがあり、慎重を期すため指定答申を延長し、この間両先生において十分調査研究することになった。菊池先生には自分の専門分野における研究、意見の主張については、なかなかゆずらず、きびしい芯の強さをあらわす一面があった。

昭和54年(1979)3月に佐渡博物館理事長兼館長を退職される4～5年前より、毎年のように私に個人的な話ではあったが、やめたいとの相談があった。理由はいつも三つほどあげられていた。一つは身体上の疲労度が強いということ、長時間バスで通勤(片道約1時間余)するので疲れて、バス内で眠る状態であること、二つは、潮時ということである。つまり80才まで博物館にしがみついているようで、世間ていが悪い、もうやめてほしいと家内がすすめるというのである。三つ目は年齢が年齢であるから、勤務現場でいつたおれるかもしれない。万一のことがあれば博物館および関係者にたいへん迷惑をかけるといったことであった。その度ごとに私は、もう少し頑張ってほしいとお願いし、疲労度のこと、健康上のことを考えて週一日かまたは半日の出勤でもよいから職にとどまることをお願いしてきた。

昭和54年2月中旬、先生から電話があり、相談したいことがあるので、佐渡高校へ出かけるが都合はどうかとの連絡があり、佐高の校長室へわざわざこられた。

健康上の都合から佐渡博物館の理事長兼館長はこれ以上勤まらぬ、もう限界にきている。君の退職を待っていた、後を継いでくれないかとの話であった。君の承諾を得て、理事会、評議員会の承認を得よう準備に入りたいとのことで、いやおうなしに承諾させられることになった。

先生は人となり、温厚、誠実、実に立派な人格者であった。まがったこと、不正、いいかげんなことがきらいで責任、正義感の強い人であった。したがって方便とか、人に迎合するとか、安易に妥協するとか、いいかげんに融通をきかせるというようなことのできる人ではなかった。

佐渡博物館関係、県文化財調査審議会関係、トキ保護対策関係のことで、公私共にながいおつき合いをさせていただいた。その間の思い出に残る、いくつかを書いてみた。